言語聴覚士学科　実務経験のある教員等による授業科目一覧

医療職業実践専門課程 言語聴覚士学科										
科目区分	授業科目	講義	演習	実習	授業・演習1単位＝22.5時間　実習1単位＝40時間					
					1年次	2年次	3年次	4年次	計	単位
専門基礎分野	解剖学Ⅰ、Ⅱ	○			60				60	2
	病理学	○			15				15	1
	形成外科学	○				30			30	2
	臨床歯科医学（口腔外科学）	○					30		30	1
	呼吸・発声・発語系の構造・機能	○				30			30	1
	神経系の構造、機能	○				30			30	1
	小　計				75	90	30	0	195	8
専門分野	言語聴覚障害学総論	○	○		30				30	1
	言語聴覚障害診断学　実習指導Ⅱ	○					30		30	1
	言語聴覚障害診断学　実習指導Ⅲ	○	○					30	30	1
	言語聴覚診断学 実習指導Ⅲ①		○					60	60	2
	失語症Ⅰ、Ⅱ	○	○			60			60	2
	言語発達障害学Ⅱ・Ⅲ	○					60		60	2
	音声障害	○					30		30	1
	運動障害性構音障害Ⅰ	○				30			30	1
	運動障害性構音障害Ⅱ	○	○				30		30	1
専門分野	嚥下障害Ⅰ、Ⅱ	○				60			60	2
	嚥下障害Ⅲ、Ⅳ	○	○				60		60	2
	小　計				30	150	210	90	480	16
	合　計				105	240	240	90	675	24

成績の評価及び履修認定について

（授業科目履修の認定に係る学則）

第 23 条　授業科目の履修に関しては、授業時間数の３分の２以上出席し、試験に合格した者に、所定の単位を与える。ただし平素の学習状況又は論文等をもって試験に代えることができる。

2　試験の成績の評価は、秀、優、良、可又は不可とし、秀、優、良及び可を合格とする。

3　前項の秀は 90 点、優は 80 点、良は 70 点、可は 60 点割を基準とし、総合的な評価を行なう。

（GPA の導入について）

GPA（Grade Point Average）とは、履修した科目１単位あたりの成績平均点を算出する方法であり、GP に該当科目の単位数を乗じて合計し、総単位数で除して履修した科目１単位あたりの成績平均点を算出する。計算結果は小数点以下第３位を切り捨てして表記する。

1　成績評価の適切な取組の概要

成績評価については、「秀(90点)、優(80点)、良(70点)、可(60点)、不可」の５段階で評価し、可以上で合格となる。また，GP（Grade Point）としては、「秀は4.0、優は3.0、良は2.0、可は1.0、不可は0.0」とする。

GPA 算出式

$$\text{ＧＰＡ} = \frac{\text{（履修科目の単位数×ポイント）の合計}}{\text{履修した講義の総単位数}}$$

2．ＧＰＡの種類

GPA は年度ごとに算出したもの（年度GPA）、入学時から現在の学期まで通算したもの（累積GPA）があり、その計算方法は次のとおり。

①年度GPA

当該年度に履修し成績評価を受けた授業科目全体のGP 合計を当該年度の履修総単位数で除して算出する。

②累積GPA

入学時から現在の学期までに履修し成績評価を受けた授業科目全体のGP 合計を入学時

からの履修総単位数で除して算出する。

授業科目区分	専門基礎	担当科目	解剖学Ⅰ、Ⅱ	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	60		
担当教員	中村 和男			受講学科	言語聴覚士学科		
				学 年	1年		

実務家教員としての経歴
回復期リハビリテーション 2年
介護福祉施設 4年
教員業務 4年

学期区分				
前期	金曜日 1時限	講義室等		
後期	金曜日 1時限	授業形式	講義・調べ学習・発表	

授業のねらい、目標	成績評価の方法
医療の基礎である解剖学についての学び、人体の構成と機能を理解する	学期末試験
	教科書
授業概要	ぜんぶわかる人体解剖図 成美堂出版
正常な人体の骨格や筋肉などの構造を知り、各々の役割や働きについて知る。正常な内蔵系を構成する器官系、組織の形態、構造の特徴について学ぶ	参考書
	言語聴覚士テキスト

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	からだの区分、全身の骨格、関節の形態	第1回	消化器系の概要
第2回	頭蓋骨のしくみ	第2回	腹部の内臓(消化管の位置、はたらき、胃)
第3回	胸部の骨、脊柱、骨盤	第3回	小腸、大腸のはたらき
第4回	上肢の骨	第4回	肝臓、胆嚢、膵臓のはたらき
第5回	下肢の骨	第5回	泌尿器の概要、腎臓の構造、尿、膀胱と排尿反射
第6回	全身の筋肉、構造、種類	第6回	内分泌系の概要
第7回	頭部の筋肉	第7回	中枢神経と末梢神経、神経の仕組み、伝達
第8回	頸部の筋肉	第8回	脳神経のしくみ、脊髄神経のしくみ
第9回	胸部の筋肉、腹部、背部、骨盤の筋肉	第9回	頭部の血管、神経、頸部の血管、神経
第10回	上肢の筋肉、下肢の筋肉	第10回	脳を保護するしくみ、構造、小脳と脳幹の構造
第11回	循環器系の概要、全身の血管、構造、はたらき	第11回	運動神経と知覚神経、自律神経
第12回	免疫、全身のリンパ系、しくみ	第12回	目の構造、ものが見えるしくみ
第13回	呼吸気系の概要、肺の構造、呼吸、ガス交換	第13回	鼻の構造、臭いを感じるしくみ
第14回	胸部の内臓(心臓の構造、拍動、血管)	第14回	皮膚構造、付属器、機能
第15回	まとめ	第15回	まとめ

授業科目区分	専門基礎	担当科目	病理学	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	15		
担当教員	中村 和男			受講学科	言語聴覚士学科		
				学 年	1年		

実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション 2年 介護福祉施設 4年 教員業務 4年
実務経験と授業	疾患の成り立ちについて臨床でよく出会う疾患(脳血管障害、肺炎など)を例に出しながら解説していく

学期区分				
	前期	金曜日 2時限	講義室等	
	後期		授業形式	講義

授業のねらい、目標	成績評価の方法
様々な疾患の基礎となる、疾病機序の知識を身に着け、 各臓器に応用して考えられるようになる	期末試験で評価
	教科書
授業概要	標準理学療法・作業療法学 病理学第4版
病気がどのような仕組みで成り立っているのかを紹介する 脳血管疾患など、言語聴覚士として必要な疾患については各論にもふれる	参考書

履修上の注意事項	講義内容は総論が中心となるため、各論については各自教科書を読んで勉強をすすめる

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回		第1回	病理学とは
第2回		第2回	退行性病変
第3回		第3回	進行性病変
第4回		第4回	復習小テスト、補足
第5回		第5回	循環障害
第6回		第6回	炎症
第7回		第7回	感染症
第8回		第8回	腫瘍
第9回		第9回	復習小テスト、補足
第10回		第10回	先天異常・奇形
第11回		第11回	遺伝
第12回		第12回	免疫
第13回		第13回	老化
第14回		第14回	代謝
第15回		第15回	総復習、補足

シラバス

授業科目区分	専門分野	担当科目	形成外科学	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	横林 敏夫			受講学科	言語聴覚士学科		
				学 年	2年		

実務家教員としての経歴	歯科医師の資格を有し、以下の通り実務経験がある。
	大学 歯学部 口腔外科 勤務(11年)
	総合病院 歯科口腔外科 勤務(29年)
	歯学博士
実務経験と授業	歯科医師の経験を活かし、将来言語聴覚士を目指す学生たちに必要な口腔外科治療の、疾患、症状、治療法についての知識を養う。

学期区分				
	前期		講義室等	言語聴覚士学科 5階ホール
	後期	水曜日 3時限	授業形式	講義

授業のねらい、目標	成績評価の方法
・言語聴覚士の言語臨床において必要な、 顎・顔面・口腔領域の疾患の知識を習得する。	定期試験
授業概要	教科書
・言語聴覚士が臨床で関わる可能性の高い疾患について、実例を紹介しながら説明する。	言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 医歯薬出版株式会社
	参考書

履修上の注意事項	

授業の計画

〈後 期〉

第1回	形成外科総論
第2回	顎顔面口腔領域の外傷
第3回	顎顔面口腔領域の外傷
第4回	顎顔面口腔領域の発育
第5回	異常と奇形・変形
第6回	口腔の再建術
第7回	口腔の再建術
第8回	
第9回	
第10回	
第11回	
第12回	
第13回	
第14回	
第15回	

シラバス

授業科目区分	専門分野	担当科目	臨床歯科医学 口腔外科学	単位数 時間数	1 30	選択必修	必修
担当教員	横林 敏夫			受講学科	言語聴覚士学科		
				学 年	2, 3年		
実務家教員としての経歴	歯科医師の資格を有し、以下の通り実務経験がある。						
	大学 歯学部 口腔外科 勤務(11年)						
	総合病院 歯科口腔外科 勤務(29年)						
	歯学博士 日本口腔外科学会指導医						
実務経験と授業	歯科医師の経験を活かし、将来言語聴覚士を目指す学生たちに必要な口腔外科治療の、疾患、症状、治療法についての知識を養う。						
学期区分	前期			講義室等	言語聴覚士学科 5階ホール		
	後期	月曜日 3時限		授業形式	講義		

授業のねらい、目標	成績評価の方法
・口腔外科治療の、疾患、症状、治療法について理解する。	定期試験
授業概要	教科書
・症例スライドを用いて、口腔外科領域疾患の病態、治療方法について講義形式で学ぶ。	最新歯科衛生士教本 口腔外科・歯科麻酔 医歯薬出版株式会社
	参考書
履修上の注意事項	

授業の計画

〈後 期〉

第1回	口腔領域の発育異常と奇形・変形
第2回	口腔領域の発育異常と奇形・変形
第3回	口腔領域の損傷
第4回	口腔粘膜疾患
第5回	口腔領域の炎症
第6回	口腔領域の嚢胞
第7回	口腔領域の嚢胞、口腔領域の腫瘍
第8回	口腔領域の腫瘍
第9回	口腔外科の小手術(歯科衛生士)
第10回	口腔外科の小手術(歯科衛生士)
第11回	歯科麻酔
第12回	顎関節疾患
第13回	唾液腺疾患
第14回	口腔領域の神経疾患
第15回	血液疾患

授業科目区分	専門基礎	担当科目	呼吸・発声・発語系の構造・機能	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	望月崇司			受講学科	言語聴覚士学科		
				学年	2年		
実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション:5年 急性期リハビリテーション:2年 教員業務:5年(非常勤職員:急性期リハビリテーション:5年)						
学期区分	前期	木曜日　3時限		講義室等	201教室		
	後期	曜日　時限		授業形式	講義		

授業のねらい、目標	成績評価の方法
①人体の呼吸や発声に関わる解剖と生理機能を理解することができる。 ②発声に関わる筋肉とその活動メカニズムを理解することができる。 ③呼吸器疾患とその検査について理解できる。	筆記試験:80% レポート:10% 授業態度:10%
	教科書
授業概要	①ディサースリアの基礎と臨床(第1巻) ②プロメテウスポケット版
・呼吸・発声発語系の構造・機能についてスライドで講義を行っていく ・時折、調べ学習を行い発表する機会を設ける ・計画が前後する可能性がありますので、都度説明する。	参考書

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	呼吸機能の概要	第1回	
第2回	呼吸機能と肺の解剖①	第2回	
第3回	呼吸機能と肺の解剖②／胸郭・横隔膜	第3回	
第4回	喉頭の解剖と機能	第4回	
第5回	鼻咽腔閉鎖機能の解剖と機能	第5回	
第6回	下顎・顔面の解剖と機能	第6回	
第7回	舌の解剖と機能	第7回	
第8回	小テストとまとめ	第8回	
第9回	呼吸機能と肺機能検査①	第9回	
第10回	呼吸機能と肺機能検査②	第10回	
第11回	呼吸器疾患①	第11回	
第12回	呼吸器疾患②	第12回	
第13回	調べ学習の発表①	第13回	
第14回	調べ学習の発表②	第14回	
第15回	まとめ	第15回	

授業科目区分	専門基礎	担当科目	神経系の構造、機能、病態	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	小山　宏和			受講学科	言語聴覚士学科		
				学　年	2年		
実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション病院：3年						
	訪問看護ステーション：4年						
学期区分	前期	木曜日　2時限		講義室等	202教室		
	後期	曜日　時限		授業形式	講義		

授業のねらい、目標	成績評価の方法
①大脳や脳幹、小脳、基底核などの構造を理解する ②大脳の機能を踏まえ病態の理解が出来る ③基本的な神経心理学的な考え方を理解する ④神経系と運動機能、神経心理学的機能のつながりを理解する	受講態度筆記試験の成績により総合的に判定する
	教科書
授業概要	病気がみえる　脳・神経
・神経系の構造・機能についてスライドで講義を行っていく ・時折、調べ学習を行い発表する機会を設ける ・計画が前後する可能性がありますので、都度説明する。	参考書

履修上の注意事項	

授　業　の　計　画

〈前　学　期〉		〈後　学　期〉	
第1回	神経系のイントロダクション	第1回	
第2回	ニューロンと神経伝達物質	第2回	
第3回	大脳の肉眼的構造	第3回	
第4回	broadmanの脳地図①－機能と障害－	第4回	
第5回	broadmanの脳地図②－機能と障害－	第5回	
第6回	大脳の血管系	第6回	
第7回	脳幹の機能と病態	第7回	
第8回	脳神経系の機能と病態	第8回	
第9回	視床の機能と病態	第9回	
第10回	大脳基底核・大脳辺縁系の機能と病態	第10回	
第11回	小脳の機能と病態	第11回	
第12回	言語と脳機能①	第12回	
第13回	言語と脳機能②	第13回	
第14回	言語と脳機能③	第14回	
第15回	まとめ	第15回	

シラバス

授業科目区分	講義	担当科目	言語聴覚障害総論	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	中村 和男			受講学科	言語聴覚士学科		
				学 年	1年		
実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション 2年						
	介護福祉施設 4年						
	教員業務 4年						
学期区分	前期	金曜日 3・4時限		講義室等	201		
	後期	金曜日 3・4時限		授業形式	講義・調べ学習・発表		

授業のねらい、目標

言語聴覚士の仕事とカリキュラムについて学ぶ

言語聴覚士がかかわる障害について全体像を学び、スムーズに各論に進めるようにする

疑問点について医学書より調べ解決できる力を培う

質疑応答が積極的に行えるようになる

成績評価の方法

学期末試験

提出物、発表内容、質疑応答においても評価

教科書

言語聴覚障害学概論 第2版

言語聴覚士テキスト 第3版

参考書

授業概要

講義を中心に進めます。講義内容に関する調べ学習と発表を求めることもあります

国試出題箇所については適宜、ドリル・小テストにより記憶の定着を図る

履修上の注意事項

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	言語聴覚障害とは、言語聴覚士の役割	第1回	障害の種類(器質性、機能性構音障害)
第2回	言語聴覚士の臨床(失語、言語聴覚障害)	第2回	障害の種類(運動障害性構音障害、吃音)
第3回	言語聴覚士の臨床(音声障害、吃音)	第3回	障害の種類(摂食嚥下系)
第4回	言語聴覚士の臨床(摂食嚥下、高次脳機能障害)	第4回	障害の種類(聴覚系)
第5回	言語聴覚障害学とは、言語とコミュニケーション	第5回	小テスト
第6回	小テスト	第6回	言語聴覚療法の基本理念、ICF
第7回	言語音と産出機構、飲み込みと摂食嚥下機構	第7回	言語聴覚療法の過程、関連職種連携
第8回	聴こえと聴覚機構、言語と脳	第8回	言語聴覚士と倫理、リスクマネジメント
第9回	小テスト	第9回	小テスト
第10回	障害の種類(失語症)	第10回	言語聴覚療法の法的基盤
第11回	障害の種類(言語発達障害)	第11回	言語聴覚障害分野がたどってきた道1
第12回	障害の種類(高次脳機能障害)	第12回	言語聴覚障害分野がたどってきた道2
第13回	障害の種類(音声障害)	第13回	小テスト
第14回	小テスト	第14回	テーマ選択によるレポート作成
第15回	まとめ	第15回	まとめ

授業科目区分	専門	担当科目	言語聴覚障害診断学　実習指導Ⅱ	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	林　耕司			受講学科	言語聴覚士学科		
				学　年	3年		
実務家教員としての経歴	甲州中央温泉病院　リハ科　3年						
	長野赤十字病院　リハ科　34年						
	現在は長野保健センター・千曲保健センター・愛の樹園・あすなろ園で小児領域の相談・訓練						
実務経験と授業	言語聴覚士としての実務経験に基づき、臨床で必要とされる失語症検査結果の分析・考察の仕方を講義してい						
学期区分	前期	火曜日　1時限		講義室等	402		
	後期			授業形式	講義		

授業のねらい、目標

臨床実習の概要を知り、言語聴覚療法（主として失語症）の評価・診断の技能を身につける。
1、評価の過程、結果の分析・問題点の抽出におけるポイントを知る。.
2, SLTAを分析し、失語症の評価や訓練を考える。
3、失語症者S氏や見学実習で診た患者様の様態を深く掘り下げる。

授業概要

・SLTAの分析、失語症患者のビデオ分析、見学実習のふり返りを通して評価や訓練の技能を身につける。

成績評価の方法

・出席日数
・提出レポート内容
・発表内容
・授業参加態度

教科書

・失語症言語治療の基礎
・失語症学[第2版]

参考書

・脳卒中後のコミュニケーション障害

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回		第1回	SLTAの分析①
第2回		第2回	SLTAの分析②
第3回		第3回	SLTAの分析③
第4回		第4回	SLTAの分析④
第5回		第5回	SLTAの分析⑤
第6回		第6回	失語症ビデオ分析①
第7回		第7回	失語症ビデオ分析②
第8回		第8回	失語症ビデオ分析③
第9回		第9回	失語症ビデオ分析④
第10回		第10回	失語症ビデオ分析⑤
第11回		第11回	評価の実際①
第12回		第12回	評価の実際②
第13回		第13回	評価の実際③
第14回		第14回	見学実習の感想と反省
第15回		第15回	まとめ

授業科目区分	専門	担当科目	言語聴覚障害診断学　実習指導Ⅲ	単位数	1	選択必修
				時間数	30	
担当教員	林　耕司			受講学科	言語聴覚士学科	
				学　年	4年	

実務家教員としての経歴	甲州中央温泉病院　リハ科　3年 長野赤十字病院　リハ科　34年 現在は長野保健センター・愛の樹園・あすなろ園で小児領域の言語治療・相談
実務経験と授業	言語聴覚士としての実務経験に基づき、失語症検査結果の分析を通して訓練計画を立て訓練実施ができるように指導していく。

学期区分				
	前期	火曜日　1時限	講義室等	401
	後期		授業形式	講義/演習

授業のねらい

言語聴覚療法（主として失語症）の評価・診断の実際を知り、訓練計画を立て、訓練が実施できる。

目標

1、SLTA及び掘り下げ検査が実施でき、結果を分析・考察できる。

2、仮説診断に基づいて訓練計画を立てる。

3、訓練が実施できる。

授業概要

1、SLTAを実施し結果を分析する。

2、掘り下げ検査を実施し結果を分析する。

3、仮説診断に基づいて訓練計画を立て、訓練を実施する。

成績評価の方法

・出席日数

・提出レポート内容

・発表内容

・授業参加態度

教科書

・失語症言語治療の基礎

・失語症学[第2版]

・脳卒中後のコミュニケーション障害

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	SLTA実施①	第1回	
第2回	SLTA実施②	第2回	
第3回	SLTAの結果分析	第3回	
第4回	問題点を抽出し訓練計画を立てる	第4回	
第5回	訓練内容検討①	第5回	
第6回	訓練内容検討②	第6回	
第7回	訓練実施①	第7回	
第8回	訓練実施②	第8回	
第9回	障害特徴に応じた訓練内容検討①	第9回	
第10回	障害特徴に応じた訓練内容検討②	第10回	
第11回	重度失語症例へのアプローチの仕方	第11回	
第12回	ケーススタディ：ブローカ失語	第12回	
第13回	ケーススタディ：ウエルニッケ失語	第13回	
第14回	ケーススタディ：伝導失語、全失語	第14回	
第15回	まとめ	第15回	

授業科目区分	専門	担当科目	言語聴覚診断学 実習指導Ⅲ①	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	60		
担当教員	望月崇司			受講学科	言語聴覚士学科		
				学年	4年		

実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション:5年 急性期リハビリテーション:2年 教員業務:5年(非常勤職員:急性期リハビリテーション:5年)
実務経験と授業	言語聴覚士として臨床で培った評価の視点や考え方を提供し、学生の分析する力を育てていく。

学期区分				
	前期	月曜日　1、2時限	講義室等	401教室と実習の出来る教室
	後期	曜日　時限	授業形式	演習

授業のねらい、目標	成績評価の方法
①臨床に必要な評価の視点、診断の視点を身につける ②評価結果を分析し、問題点の抽出、訓練プログラムの立案ができる ③立案した訓練プログラムを実際に行い、結果をまとめることができる	演習の実績・レポート内容から判定する
	教科書
授業概要	言語聴覚士のための臨床実習テキスト　成人編
・模擬患者を想定し、評価と訓練プログラムの立案を行う ・実際に立案した訓練をお互いに実施し経過をまとめる ・担当教務は適宜指導・アドバイスを行う	参考書
	適宜、参照

履修上の注意事項	演習の場合、動ける服装で来てください

授業の計画

〈前学期〉

第1回	評価と臨床　イントロダクション	第16回	④症例提示ー嚥下応用編ー
第2回	①評価実習レポートの掘り下げー嚥下編ー	第17回	〃
第3回	〃	第18回	〃
第4回	〃	第19回	④の振り返りとフィードバック
第5回	①の振り返りとフィードバック	第20回	⑤症例提示ー構音応用編ー
第6回	②評価実習レポートの掘り下げー構音編ー	第21回	〃
第7回	〃	第22回	〃
第8回	〃	第23回	⑤の振り返りとフィードバック
第9回	②の振り返りとフィードバック	第24回	レポート分析の方法①
第10回	嚥下障害と構音障害に関する補足	第25回	レポート分析の方法②
第11回	失語症に関する補足	第26回	総括
第12回	③評価実習レポートの掘り下げー失語編ー	第27回	↓
第13回	〃	第28回	↓
第14回	〃	第29回	↓
第15回	③の振り返りとフィードバック	第30回	↓

授業科目区分	専門	担当科目	失語症Ⅰ、Ⅱ	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	60		
担当教員	小山　宏和			受講学科	言語聴覚士学科		
				学　年	2年生		
実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション病院:3年 訪問看護ステーション:4年						
実務経験と授業	回復期病院、生活期リハビリでの実務経験を基にした知識と経験を伝える。						
学期区分	前期	木曜日　3時限		講義室等	202		
	後期	火曜日　2時限		授業形式	講義、演習		

授業のねらい、目標	受講態度、課題、
失語症の基礎を理解する 失語症の言語症状を理解する 古典的タイプ分類を理解する 認知神経心理学的評価の基礎を理解する 病巣と失語症状	中間・期末試験を総合的に評価する
授業概要	教科書
神経心理学の定義を知るとともに、失語症の定義、病態、症状について学ぶ。失語症のタイプ分類やその他の言語病理学的障害を把握する。また、認知神経心理学的メカニズムの基礎を知る。	失語症学第2版　失語症言語治療の基礎 なるほど納得失語症
	参考書

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	失語症の歴史、基礎知識	第1回	認知神経心理学モデルとは
第2回	失語症の神経基盤	第2回	聴覚的理解
第3回	〃	第3回	呼称
第4回	失語症の言語症状	第4回	復唱
第5回	〃	第5回	音読
第6回	〃	第6回	書称
第7回	確認テスト	第7回	書取
第8回	古典的タイプ分類	第8回	小テスト
第9回	〃	第9回	文レベルの処理について
第10回	〃	第10回	構文能力について
第11回	〃	第11回	失語症鑑別診断検査
第12回	〃	第12回	掘り下げ検査
第13回	その他のタイプ	第13回	SLTAの評価
第14回	復習と補充	第14回	〃
第15回	まとめ	第15回	まとめ

授業科目区分	専門	担当科目	言語発達障害学Ⅱ・Ⅲ	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	60		
担当教員	林 耕司			受講学科	ST学科		
				学 年	3年		
実務家教員としての経歴	甲州中央温泉病院 リハ科 3年						
	長野赤十字病院 リハ科 34年						
	現在は長野保健センター・愛の樹園・あすなろ園で小児領域の相談・訓練						
	言語発達遅滞の言語治療						
実務経験と授業	言語聴覚士としての実践経験に基づき小児の言語発達遅滞の検査・訓練の授業を展開していく。						
学期区分	前期	月曜日 1時限		講義室等	402		
	後期	月曜日 1時限		授業形式	講義		

授業のねらい、目標	成績評価の方法
言語発達障害の基礎知識を十分なものとし、主として国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査に習熟し、包括的な評価・訓練の知識を身につける。また、各種検査や様々な支援方法も学ぶ。	・期末試験 ・小テスト
	教科書
	・言語発達遅滞の言語治療 ・言語発達障害学 第3版
授業概要	参考書
国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査に習熟しながら、検査記録のつけ方、評価の仕方を実際の症例ビデオを通して学ぶ。	

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	小児の言語発達障害の臨床って何だろう？	第1回	ビデオ症例の分析①
第2回	前言語期の発達段階ー段階1・2ー	第2回	ビデオ症例の分析②
第3回	単語獲得期の発達段階ー段階3 事物の記号ー	第3回	ビデオ症例の分析③
第4回	前期構文獲得期の発達段階ー段階4 語連鎖ー	第4回	ビデオ症例の分析④
第5回	中期構文獲得期の発達段階ー段階5 統語ー	第5回	ビデオ症例の分析⑤
第6回	国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査の特徴	第6回	各種検査の内容①
第7回	＜S-S法＞の3側面アプローチ①	第7回	各種検査の内容②
第8回	＜S-S法＞の3側面アプローチ②	第8回	各種検査の内容③
第9回	症状分類	第9回	支援方法と実際①
第10回	言語発達障害の評価	第10回	支援方法と実際②
第11回	症例ビデオの検査実施記録をつける①	第11回	支援方法と実際③
第12回	症例ビデオの検査実施記録をつける②	第12回	AAC①
第13回	症例ビデオの検査実施記録をつける③	第13回	AAC②
第14回	まとめ①	第14回	AAC③
第15回	まとめ②	第15回	まとめ

授業科目区分	専門	担当科目	音声障害	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	小山　宏和			受講学科	言語聴覚士学科		
				学　年	3年生		
実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション病院:3年 訪問看護ステーション:4年						
実務経験と授業	回復期病棟、生活期リハビリでの実務経験を基にした知識と経験を伝える。						
学期区分	前期	火曜日　3時限		講義室等	402		
	後期	曜日　　時限		授業形式	講義中心		

授業のねらい、目標	成績評価の方法
音声生成の機序や関係器官の仕組みを知る 音声障害の種類や症状を理解する 実際の音声を聴き、音声評価を行える	受講態度、課題、期末テストで評価
	教科書
授業概要	標準言語聴覚障害学　発声発語障害学第2版
・スライドで講義を行っていく ・スライドだけでなく音声を聞き取る練習も行う	参考書

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	音声を構成する要素、その仕組みについて	第1回	
第2回	声帯の構造、音声生成の機序	第2回	
第3回	喉頭の解剖	第3回	
第4回	音声障害の種類、定義	第4回	
第5回	器質性音声障害	第5回	
第6回	運動障害性音声障害、機能性音声障害	第6回	
第7回	検査の種類と目的	第7回	
第8回	評価と鑑別診断	第8回	
第9回	GRBAS評価	第9回	
第10回	音声訓練の目的、種類、適応	第10回	
第11回	音声訓練①	第11回	
第12回	音声訓練②	第12回	
第13回	復習と補充①	第13回	
第14回	復習と補充②	第14回	
第15回	まとめ	第15回	

授業科目区分	専門	担当科目	運動障害性構音障害Ⅰ	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	望月崇司			受講学科	言語聴覚士学科		
				学年	2年		

実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション:5年 急性期リハビリテーション:2年 教員業務:5年(非常勤職員:急性期リハビリテーション5年)
実務経験と授業	臨床で得た知識と運動障害性構音障害の特徴や評価、分析の仕方などを学生に伝え、より臨床をイメージした学びに繋がるように支援する。

学期区分				
前期	曜日　時限	講義室等	201教室
後期	火曜日　4時限	授業形式	講義

授業のねらい、目標

①神経系や呼吸器系、音声学などの基礎的学習を構音障害の理解につなげることができる
②運動障害性構音障害に必要な運動器系・神経系の障害を理解する
③運動障害背構音障害のタイプを学び、タイプごとの特徴が理解できる
上記を理解し説明できるようになる

成績評価の方法

筆記試験の成績:80%
レポート:10%
授業態度:10%

授業概要

・運動障害性構音障害の理解に必要な神経や運動メカニズムについて教科書ベースのスライドにて概説していく。
・タイプを理解するためにはディサースリア検査の実施が必要になるため、各自練習を進めていくこと。

教科書

ディサースリアの基礎と臨床　2巻
ディサースリアの基礎と臨床　3巻

参考書

神経原性発声発語障害　dysarthria
ディサースリアの基礎と臨床　1巻

履修上の注意事項	空き時間などを利用してディサースリア検査の練習を行い、適宜質問に来ること。

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回		第1回	ディサースリアと神経運動系　イントロダクション (スライド基礎編①)
第2回		第2回	運動の伝導路とその障害 (スライド基礎編②)
第3回		第3回	ディサースリアに必要な運動系 (スライド基礎編③)
第4回		第4回	錐体路の特徴とその障害 (スライド基礎編④)
第5回		第5回	下位運動ニューロンの特徴とその障害 (スライド基礎編⑤)
第6回		第6回	錐体外路系の特徴とその障害 (スライド基礎編⑥)
第7回		第7回	小脳の特徴とその障害 (スライド基礎編⑦)
第8回		第8回	ディサースリア検査の特徴と実施方法① (スライド基礎編⑧)
第9回		第9回	ディサースリア検査の特徴と実施方法②
第10回		第10回	ディサースリア検査の特徴と実施方法③
第11回		第11回	ディサースリアのタイプとその特徴① (スライド基礎編⑨)
第12回		第12回	ディサースリアのタイプとその特徴②
第13回		第13回	ディサースリアのタイプとその特徴③
第14回		第14回	ディサースリアのタイプとその特徴④
第15回		第15回	ディサースリアのタイプとその特徴⑤

授業科目区分	専門	担当科目	運動障害性構音障害Ⅱ	単位数	1	選択必修	必修
				時間数	30		
担当教員	望月崇司			受講学科	言語聴覚士学科		
				学年	3年		

実務家教員としての経歴
回復期リハビリテーション:5年
急性期リハビリテーション:2年
教員業務:5年(非常勤職員:急性期リハビリテーション:5年)

実務経験と授業	臨床で得た知識、運動障害性構音障害の特徴や評価、分析の仕方などを学生に伝え、より臨床をイメージした学びに繋がるように支援する。

学期区分				
前期	火曜日 4時限	講義室等	402教室
後期	曜日 時限	授業形式	講義／演習

授業のねらい、目標	成績評価の方法
①2年生で学んだ運動障害性構音障害の基礎を活かして評価・分析を行い治療アプローチを考えられるようになる ②簡潔にまとめることができ、問題点の抽出がおこなえる ③治療アプローチを理解し、病態に応じた対応が可能となる	筆記試験:80% 発表と授業態度:20%
	教科書
授業概要	ディサースリアの基礎と臨床 3巻
・ディサースリアの病態メカニズムについて説明し、出現症状を神経学的・運動学的に説明できるように進めていく ・ディサースリアのアプローチを概説し、実技も行っていく ・適宜、調べ学習を行い、発表の場を設ける	参考書
	神経原性発声発語障害 dysarthria ディサースリアの基礎と臨床 1巻、2巻

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	ディサースリアのまとめ方 ーsoapー (スライド臨床編①)	第1回	
第2回	ディサースリアに必要な検査① (スライド実践編②)	第2回	
第3回	ディサースリアに必要な検査② (スライド実践編③)	第3回	
第4回	構音障害に対する運動的アプローチについて (スライド実践編④)	第4回	
第5回	呼吸障害の分析(スライド実践編⑤)	第5回	
第6回	呼吸障害に対する治療(スライド実践編⑥)	第6回	
第7回	発声障害の分析(スライド実践編⑦)	第7回	
第8回	発声障害に対する治療(スライド実践編⑧)	第8回	
第9回	鼻咽腔閉鎖機能不全の分析(スライド実践編⑨)	第9回	
第10回	鼻咽腔閉鎖機能不全に対する治療 (スライド実践編⑩)	第10回	
第11回	口腔構音器官運動障害の分析 (スライド実践編⑪)	第11回	
第12回	口腔構音器官運動障害に対する治療 (スライド実践編⑫)	第12回	
第13回	発話速度の調整法・その他アプローチ (スライド実践編⑬)	第13回	
第14回	実践的アプローチ①(神経運動学的分析)	第14回	
第15回	実践的アプローチ②(神経運動学的分析)	第15回	

授業科目区分	専門	担当科目	嚥下障害Ⅰ、Ⅱ	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	60		
担当教員	小山　宏和			受講学科	言語聴覚士学科		
				学　年	2年生		
実務家教員としての経歴	回復期リハビリテーション病院：3年 訪問看護ステーション：4年						
実務経験と授業	回復期病院、生活期リハビリでの実務経験を基にした知識と経験を伝える。						
学期区分	前期	水曜日　3時限		講義室等	202		
	後期	火曜日　2時限		授業形式	講義中心		

授業のねらい、目標	成績評価の方法
健常者の摂食嚥下を知り、理解する モデル（5期、プロセス）での嚥下パターン理解 嚥下に関与する筋の名称、働きの把握 発達・加齢による摂食嚥下機能の変化を知る 摂食嚥下障害の評価・検査・診断の仕方を知る	受講態度、課題、期末テストで評価
	教科書
授業概要	摂食嚥下リハビリテーション　第3版
摂食嚥下障害の基礎知識（解剖、整理）を学び、各種の嚥下障害の特徴を把握する。嚥下障害の病態を深く理解し、摂食嚥下障害に対する評価方法を知る。	参考書

履修上の注意事項	

授業の計画

〈前学期〉		〈後学期〉	
第1回	摂食嚥下の概要	第1回	嚥下Ⅰの復習
第2回	摂食嚥下の生理	第2回	嚥下Ⅰの復習
第3回	摂食嚥下の生理	第3回	発達と摂食嚥下機能
第4回	プロセスモデル	第4回	摂食嚥下機能の加齢変化
第5回	摂食嚥下の概要	第5回	フレイルと栄養障害
第6回	5期モデル、3期4期モデル	第6回	摂食嚥下障害の評価・検査・診断
第7回	プロセスモデル	第7回	〃
第8回	プロセスモデル	第8回	〃
第9回	摂食・嚥下器官の解剖（口唇・口蓋・頬・舌・歯）	第9回	〃
第10回	摂食・嚥下器官の解剖（咽頭・食道）	第10回	〃
第11回	摂食嚥下に関与する筋	第11回	〃
第12回	摂食嚥下に関与する筋	第12回	〃
第13回	摂食・嚥下器官の解剖（食道）	第13回	〃
第14回	復習と補充	第14回	まとめ
第15回	まとめ	第15回	まとめ

授業科目区分	専門	担当科目	嚥下障害 Ⅲ、Ⅳ	単位数	2	選択必修	必修
				時間数	60		
担当教員	望月崇司			受講学科	言語聴覚士学科		
				学 年	3年		

実務家教員としての経歴
回復期リハビリテーション:5年
急性期リハビリテーション:2年
教員業務:5年(非常勤職員:急性期リハビリテーション)

実務経験と授業	臨床で得た知識、嚥下障害の評価や訓練の仕方などを学生に伝え、より臨床をイメージした学びに繋がるように 支援する

学期区分				
前期	月曜日 2時限 、水曜日 4時限	講義室等	402教室
後期	曜日 時限	授業形式	講義・演習

授業のねらい、目標

①2年生で学んだ嚥下障害の基礎を評価・治療へ応用することができる
②嚥下障害の評価を学び、症候メカニズムを説明することができる
③嚥下障害の治療を学び、問題に対する治療を立案できるようになる
④嚥下障害に対して生活を見据えた対応が可能となる

授業概要

・嚥下障害の評価方法・治療方法を概説していく。
・嚥下障害の画像や検査結果を提示し、仮説診断・治療方法の立案を行う。
・調べ学習をおこない、講義開始前に発表を行ってもらう。

成績評価の方法

筆記試験:80%
発表や授業態度:20%

教科書

摂食嚥下リハビリテーション第3版
誤嚥性肺炎ただいま診療中

参考書

脳卒中の摂食嚥下障害第3版
嚥下障害ポケットマニュアル第4版

履修上の注意事項	演習の場合、動ける服装で来てください

授業の計画

〈前 学 期 : 嚥下障害Ⅲ、嚥下障害Ⅳ 〉

第1回	嚥下障害 イントロダクション①(スライド基礎編①)	第16回	段階的摂食訓練と栄養管理経腸栄養、食形態①(スライドリハ編④)
第2回	嚥下障害 イントロダクション②(スライド基礎編⑦)	第17回	段階的摂食訓練と栄養管理経腸栄養、食形態②(スライド実践編②)
第3回	嚥下障害 イントロダクション③(スライド基礎編⑧)	第18回	リスク管理と呼吸器疾患(スライド実践編①)
第4回	スクリーニング検査ー理論編ー(スライド評価編①②)	第19回	脳血管障害と外傷性脳損傷への対応①(スライド実践編③)
第5回	スクリーニング検査ー実践編ー	第20回	脳血管障害と外傷性脳損傷への対応②(スライド実践編③)
第6回	嚥下内視鏡検査①(スライド評価編③)	第21回	手術・補綴による対応(スライドリハ編⑥)
第7回	嚥下内視鏡検査②(スライド評価編③)	第22回	神経変性疾患への対応(スライド実践編④)
第8回	嚥下造影検査①(スライド評価編④⑤)	第23回	認知症や頸椎疾患への対応(スライド実践編④⑤)
第9回	嚥下造影検査②(スライド評価編④⑤)	第24回	復習と演習(評価実習)
第10回	嚥下造影検査③(スライド評価編④⑤)	第25回	↓
第11回	画像診断の演習と重症度分類(スライド基礎編⑨)	第26回	↓
第12回	成人の摂食嚥下障害の対応(スライドリハ編①)	第27回	総合演習①
第13回	間接的訓練ー理論編ー(スライドリハ編②)	第28回	総合演習②
第14回	間接的訓練ー実践編ー	第29回	総合演習③
第15回	直接的訓練と摂食練習の注意事項(スライドリハ編③)	第30回	総合演習④